

君との 再会まで 長いこと 長いこと 異世界復生

2



アニッキーブラッザー



主な登場人物

第一章 プリンセシユラバ

前世の日本で不良高校生だった俺、朝倉リューマは修学旅行中にクラスごと事故に遭い、ヴェルト・ジーハとして異世界に転生した。

今は、同じく転生者で元担任の小早川先生がやつてるラーメン屋に住み込んで働いている。昔は朝が苦手だったが、もうすっかり大丈夫だ。何せラーメン屋は毎朝、スープの仕込みとか店内の掃除とか、色々やることがあるからな。

でも……今朝はなかなかベッドから起き上がりない。

昨日、成り行きで人類対魔族の戦争に参加したために、心身が疲れ切っているというのもある。だが、そのせいだけじゃなかつた。

「ありや？」

腹の上に何か乗つてる。つていうか、誰かにしがみつかれている。

薄く目を開けると、目の前でグツスリ眠つている魔族のお姫様、ウラがいた。

あ、そういうや、昨夜は一緒に寝てやつたんだっけ？

ウラはよく寝ている。ただ、目元が赤い。涙のあとだらう。

それでもこうしてグッスリ眠っているのだから、ちつとは俺に気を許してくれているのかな。

にしても……ベッタリしがみつきすぎだ。

「つーか、白と水色のパンツ見えてるぞ。お姫様が、ちよつとはしたないんじゃねえか？」
めくれ上がりつたワンピースパジャマの裾すそを伸ばしてやり、俺はゆっくりと体を動かす。
絡からまつた紐ひもをほどくように、そつと抜け出そうと……。

「ヴエ、ヴエルト！」

「うお、起きた！」

俺がわざかに動いただけで、ウラが目を覚ました。

悪夢でも見ていたかのような表情で俺を見て、何度も瞬まばたきをしたあと、安心したのか大きく息をつくウラ。

「よかつた……」

「お、おお？」

「夢で、ヴエルトが、私を置いてどこかに行つてしまつて……」

そんな夢を見たのか？ にしても、慌あわてすぎだろ。

「ヴエルト、その……おはよう」

「……お、おはよう」

「ふつ、ふふふふふ」

今度は嬉しそうに笑い出しやがつた。何なんだ？

「不思議な感じだ」

「あつ？」

「これまで朝起きたら、城の女官が扉とびのところに立つていた。誰かと一緒に寝て、こんなに間近で挨拶あいさつしたのは初めてだ」

「おお、そうかそうか。そりやよかつたな。俺なんてこの家に住むことになつた初日は、先生にお玉で殴うなられて起こされたつてのによ」

ウラは俺をじつと見て、頷うなぐ。

「でもいいな、こういうの。うん、何かいい」

「はは、そーか。そういうや、親父とは一緒に寝てなかつたのか？」
「何を言う。私はもう十歳だぞ？ そんな子供じみたことするはずがないだろ」

……ここはツツコミを入れたほうがいいんだろうか？

十歳つて、まだガキだらうがよ。

いや、ツツコミを入れるなら今の言動にじやなくて……自分の唇くちびるに指を当てて、トロンとした目で俺を見てることにか？

「ヴェルト……ん

「……」

「ほら、お、おは、おはようのアレだ。昨日は、私から、その、し、しただろ?」

「……」

「こ、ここ、今度は、ヴェルトからだ。ほら、ん~!」

ウラはしきりに唇を突き出してくる。

「……ヴェルト、ん~！ ほら、ん！」

鮫島、お前の娘はおはようのキスをするのが日課なのか？ だとしたら、誰としてたんだ？ まさかお前か？ 世界に恐れられた魔王の、お前なのか？

で、お前、そんな娘を俺に託したのかよ？ 元クラスメートつてだけで？

しかも、頬やおでこへのチューでこまかす選択肢はない。唇の一択だけ。さつきは気を許してくれたと安心したが……これはちょっと許しすぎだ。

やつぱりこいつも、この国の王女で俺の幼なじみであるフォルナと同じで、とんでもねえマセガキだな。

「こら」

俺はウラの鼻をつまんで捻つてやつた。

「ふぎや！ 痛あ！ な、何をする！」

そんな恨めしそうに睨んでもダメだ。

ガキのキヤツキヤウフフにや付き合つてらんねー。

「ヴェルト、お前は~、わ、私としたくないのか！」

「くはははは、残念でした」

「う~、おのれ~、私が、私がこんなに……」

「ふん、バーカ。十年早えよ」

「この照れ屋め！」

あ？

「いやウラ、お前、なに白惚れを言つて……」

「お前は意氣地のない奴だ。まったく、情けないぞ！」

「うるせーな。大きなお世話だよ」

「仕方ない。お前は本当に仕方のない奴だから……私からしてやるんだからな」

「はっ？」

……しまつた、この流れは。

「ん」

完全に油断してて、隙を突かれてしまつた。

一瞬のうちにウラの両手が俺の後頭部をロツクし、俺は身動きが取れなかつた。そして唇にキスされてしまったのだ。

鮫島……見てるか？ 俺は、悪くね——よな？

だからさ——。

「朝早く失礼しますわ！ ヴェルト、起きていますか？ 昨日はあの女とあれ以上何もなかつ——」

だから……。

「おーい、ヴェルト、起きてるかー？ ラーメンの仕込みをするから早く顔洗つて——」

頼むから俺の代わりに、こいつらに言つてくれ。

俺は何も悪くないって。

「う、あ、こ、この浮氣者おおおおおおおお！ それに、泥棒魔族うううう！」

「こんの、ロリコン小僧があああああああ！」

「 フォルナと先生が同時に叫ぶ。フォルナはそのままベッドの上のウラにダイブした。

やべえ、すぐえめんぐせえ。

しつかしウラヒフォルナ、気の強い奴らだからそのうちモメるとは思つていたが……早速かよ。

お姫様が、朝つぱらから取つ組み合いしてんじやねえぞ。

「あ、あなた、あなた、あなた！ ヴエ、ヴェルトに何をしていますの！」

「べ、別に何でもない、『おはよう』の挨拶をしただけだ。それより人の部屋に無断で入つてくる

とは……姫にしては礼儀に欠けるのではないか？」

「は？ 何を言いまして？ おはようの挨拶？ 礼儀に欠ける？ 人のヴェルトに手を出しておいで、あなた一体何を言つてますの!?」

「違う、ヴェルトは昨日から私のものになつたんだ！」

おいおい……。

「何を！ ヴェルトは五年前からずつとワタクシのものですわ！」

「でも、私は、もうキスしたぞ！」

こら……。

「残念でした！ そんなもの、ワタクシはもう大昔に済ませてますわ！」

頼むから、喧嘩はやめろ。

「ヴェルト！ お前、ウラちゃんが元クラスメートの娘だつて分かつてんのか!?」

先生もお願いだから落ち着いてくれ。何を朝からキレてんだよ。

「あ～もう、メンドクセ。殴れ殴れ、もう反論するのもかつたりい」

「そうか、なら遠慮しねえ！」

頭に先生の拳骨が飛んできた。

「いつて！ マジで殴つた！ マジで殴つた！」

「おお？ だつたらどうだつてーんだ、このロリコンのクソガキが！ 『体罰だ』つて国王にでも

訴えるか？」

「普通に考えろつて。ガキ同士で戯れてるだけだらうが！」

俺は口リコンなんかじやねーつての。

というか——。

「つたく、大体先生だつてよ、よく知つてんだろう？ 俺が惚れてんのは……」

そう、こんな十歳のガキども、俺にとつてはただのマセガキだ。

俺が惚れてるのは、あいつだけ。

「ほら、俺には……神乃がいるし……」

やべ。なんか自分で言つて恥ずかしくなつてきた。

神乃美奈。俺が初めて好きになつた、高校の同級生。こいつを探すことが、俺の今的人生の目標だ。

「ヴエルト！ 誰ですの、そのカミノとは！ そういえば以前にも言つてましたわね！」

「ヴエルト！ カミノとは一体どこのどいつだ！ 昨日も父上と話してたな！」

そう言いながら詰め寄つてきた二人のパンチが、同時に俺の頸を打つた。

おい、何でお前らは、こんな時だけスゲー息が合つてんの？

打ち上げられて今度は天井とキスした俺の意識が遠ざかり……先生の家に厄介になつて、初めての二度寝を経験することになつた。

†

まつたく、朝から散々な目に遭つたぜ。

女に好かれるのが、ここまでめんどくさいとは思わなかつた。女というか……子供な。

あのあとラーメンの出前のついでに王都の街を案内することになり、俺は今、ウラと並んで街中を歩いている。

無理矢理ウラに手を繋がれてるけど、まあいい。

なぜか一緒にきてきたフォルナが俺の手を握つてきたのも、まあいい。

俺は出前の岡持ちを魔法「浮遊」で浮かせて運んでいるから、両手が塞がつても問題ない。

でもさ。

「ふー！ ふー！ ふー！」

「キシャアア！」

俺を挟んで威嚇し合うのはやめてくれ。

「ここが本屋だ。まあ、勉強嫌いな俺はあんまり来ないけどな」

「フー！ フー！ フー！」

「ガルルルルルル」

「んで、あつちは肉屋。店のおつちゃんと仲良くなると、試食でハムとか食わせてくれる」

「ギリギリギリギリギリギリ」

「グルウ、ガルウウ！」

「そんであつちが、俺がちよくちよく行く武器屋で——」

「フシュウウウウ！」

「グウウウウウ！」

「俺のがまん我慢も限界だつた。」

「テメエら、いい加減にしろ！」

「繋いだ手を放し、俺は拳骨で二人を叩いてやつた。」

「あいたつ」

「うつ、ヴェルト、何をする」

「こいつらは仲が悪すぎる。」

「あのな、フォルナ。お前は俺がウラに構つてばつかとかで嫉妬しつとしてんだろうけど、仕方ねーだろ？ こいつは一人ぼつちなんだから、俺が何とかしてやんねーと」

「うつ、分かってますわ。というか、嫉妬しつとという言い方はストレートすぎます……もう少しこう、マイルドに……」

「ウラ、おめーもだよ。フォルナをあんま挑発すんなよな。大体、ちよーつと俺が力になつてやつ

たぐらいでベタベタすんのもどうかと思うぞ？」

「ぐつ、ヴエ、ヴェルト、お前はデリカシーがなさすぎるぞ！ 悪かつたな、簡単にお前にコロツ

といつてしまつて。でも仕方ないだろ！」

「つたく、だからガキつてのは面倒なんだよ。」

そいや前世まちえんの幼稚園ちちえんとかでも、同じ組の女子から「大きくなつたらリューマ君のお嫁さんになつてあげる」なんて言われたことがあつたが、いざ成長してみたら、そいつら全員俺をド無視しやがつたからな。

ほんとにめんどうせー。

「でもヴェルト……ワタクシはこの女の、ヴェルトに対する思いが分かるから、我慢できませんわ！」

「そう言つてウラを指差すフォルナ。」

「こいつはズルイ！ 私の気持ちを知つていながら、お前を独占しようとしている！」

「ウラも負けじと指を向ける。」

「独占？ 当然です！ ヴェルトはワタクシのものですから！」

「違う！ 昨日から私のものになつたんだ！」

「おいお前ら、街の連中がガン見してやるぞ。」

こんな公衆の面前で……ああ嫌だ、もう帰りたい。

「つたく……ん？」

あれ？ そういえばおかしいな。いつも俺とフォルナをからかう王都の連中も、こんな絶好のネタが揃つてゐるのに何も言つてこねえぞ？

いや、見てはいるけど、どいつもこいつも遠くでヒソヒソ話してゐるだけで……。

「ねえ見て。あの子よ、例の魔族の娘つていうのは」

「ヴェルトが連れてきたそうだが、この国が魔族に狙われたりしたらどうするんだ？」

ああ、そういうことか。

そういうえば俺はこいつらの目——街の連中がウラに向けている目を知つてゐるな。

神乃に無理矢理学校へ登校させられて、俺が教室に足を踏み入れた瞬間、誰もが向けてきた目と同じだ。

厄介者。
やっかいもの。

関わりたくない。

そんなところだろう。

ただし、俺の場合は神乃とという存在がいたから、そういう目を向けていたクラスの奴らも徐々に変わつていつた。普通に俺に話しかけてくるようになつた。体育祭が終わつたあたりから、特に。そつか、そつだよな。

ウラは俺とは事情が違つかもしれないが……それでも俺にしてやれることが、一つあつたんだ。

俺は神乃に、学校へ行くきつかけを作つてもらつた。
だが、最初からクラスに溶け込めたわけじゃない。

転機は体育祭だ。

神乃に煽られてこの行事に参加した俺は、気づけばクラスの奴らと一緒に、優勝目指して夢中で戦つていた。そしていつの間にか馴染んでいた。

ウラもそうなればいいんだ。あの時の俺と同じように。
その環境を、俺が用意してやればいい。

「大体あなたは魔族の王女とはいえ、今後はこの国に暮らすのですから、もう少し慎みを持ちなさい！」

「うるさい。お前はこの国の姫なんだからヴェルトみたいな平民じやなく、どつかの貴族と結婚すればいいだろう！」

よし、やるか。

名づけて、
呉越同舟作戦。

体育祭の時の他クラスじやねーが、こいつら二人の「共通の敵」を作ればうまくいくはずだ。

「お前ら！ いい加減にしねーと……一人まとめて嫌いになるからな！ おらー！」

俺は二人の肩に一度触れてから、両手を胸の高さまで振り上げた。

「ふえつ、なつ、えつ！」

「な、何!? こ、これは!」

二人とも驚いている。そして街の連中も。

フォルナとウラが、急に宙に浮いたからだ。

「こ、これは、飛翔? いえ、違いますわ!」

「バカな、ヴエ、ヴエルト、お前、一体私に何をした!」

「なーに、じやじや馬どもにちよつとしたお仕置きを、な」

俺が両手を交差させる。すると、宙に浮いた二人が頭をぶつけ合つた。

「ぎやつ、あた、あたたた、ヴエルト、これはあなたの魔法ですか!?」

「くつ、どういうことだ、何が起きてる!」

宙に浮いて身動きが取れない二人。事態の把握で頭がいっぽいいっぽいつてどころか?

「ああ、俺の魔法だ。俺が使える、たつた一つのな」

「でも、あなたが使えるのは……浮遊だけだつたはず!」

「浮遊だと? だがあの魔法は、生物には効かないのではないか?」

そのとおり。浮遊が有効なのはあくまで術者が触れた「物」のみ。

人や魔族や動物など、「生物」を浮かせることはできない。でも、そんなことは問題じゃない。

生物の周りの物を浮かせればいいだけだろ。

だから俺は、二人が着てている服を浮かせた。それにつられて、着てている本人も浮いてるってだけ

の話だ。

「二人がそう思わないんだつたら、それはそれで儲け物だけどな。相手が混乱してくれりや、ますますやりやすいからよ。

「ぐつ、何でもいいです、とにかくこんな恥ずかしいですわ! ヴエルト、早く降ろしなさい!」

「その、ス、スカートが……」

自分のひらひらスカートの裾を手で押さえながら、顔を赤くしてモジモジする一人。

これでちつとは大人しくなるか?

「ほれ」

俺は指を鳴らして浮遊を解除する。本当はこんな動作は必要ないのだが、何となくカツコイイからやつてみた。すると二人は急降下し、受け身も取れずに地面に落ちた。

「ぎやふ!」

「あた、いた、たた、お、おのれ」

子供とはいえ、人間と魔族の天才児相手でも……十分通用するな。やっぱり使えるぞ、この魔法。

「どーだ? ちつとは懲りたか? くつだらねー喧嘩してんじやねえよ。それと一つ教えとくが、俺はうるさいマセガキは好きじやねーんだよ」

「つつ、ヴェールト!」

「ヴエルトのくせに、私に何という無礼を」

ああ、睨んでる睨んでる。二人とも怒りに満ちた目をしてやがる。

「ヴエルト、ちょっとやりすぎですわ！」

「ヴエルトとして最低ですわ！」

「ヴエルト、お嫁さんに対してこの仕打ちは度が過ぎるぞ？ 私がみつちり教育してやろう！」

おお、息ピッタリ。こんなに俺の思惑とおりにいくとは。ちょろいもんだぜ。

「あらら、元気なガキどもだな。度が過ぎてんのはお前らだろ？ つか、俺にお仕置き？ やつてみろ、チビッコども！」

もう少しだけからかって……じゃなくて、泥を被つてやるか。

二人が同時に駆け出そうとする。だが、俺は再び浮遊で奴らを浮かせる。

「いくぜ、ふわふわ時間！」

「同じ手は通用しませんわ！ 身の程を知りなさい！」

「何度も通じると思うな！」

その瞬間、俺の両手に刺激が走った。

これは、奴らの魔力やオーラによる干涉で、俺の浮遊が強制的に解除されたことを意味する。

「雷神の乙女よ、その涙を纏いし力に変えて——無限の雷轟、世界に光れ！」

フォルナの詠唱。電気が空気を伝わって、ビリビリと痛い。

「魔道兵装、迅雷烈覇！」

さらにフォルナが何やら凄そうな単語を叫ぶと、その体から閃光があふれ出した。

な、何それ？ マドーハーソー？

ああ、魔法学校の授業で聞いたことがあるな。

魔法を放出するんじゃなく、その莫大なエネルギーを自分に向けて身を包み込むことで攻撃と防御を一体化させる技、だつけ？

だけど、あまりにも高度過ぎて学校の教員もできない、とかいう話だった。

「こおおおおおお！」

ウラはといえば、何やら精神統一して、目に見えるほどの凄まじいオーラを纏いやがった。

……ごめんなさい……俺が大人げなかつた。許してくれ。

それつてどー見ても、最強モード的なやつだろ？

つかお前ら、分かつてんのか？ ここは街のど真ん中だぞ？

街の連中がワードのキャーだの悲鳴を上げてることに、気づかねえのか？

「ひ、姫様と魔族の子が、なんか怒つてるぞ！」

「ギャー！ せ、静電気がー！」

「い、今魔族の娘の気合いみたいなやつで、腰が抜けちまつた……」

気づけば街の連中の反応は、「あれが魔族か。厄介者め」から、「何が起こった？」に変化して

いる。

まあ、これはこれでいいかも——。

「どうやら、ヴェルトが二股かけてるみたいだ！」

「ヴェルト、お前、最低だぞ！」

「姫様を泣かせるなんて許せないわ！」

いや、よくねーな。俺はただ二人を怒らせて、奴らがそれで意氣投合すればいいと思つただけなのに……街の連中まで俺の敵になつてんじゃねーかよ。

でもまあ、アレだ。これはあと一押しすれば、ウラも街の連中に受け入れてもらえそうだ。

俺、死ぬかもしれねーけど……。

「仕方ねえ、遊んでやるか。かかつてこいよ」

精一杯かつこつけて言つたが、内心ピクピクだ。

でも、やるしかねえ。

二人とも俺のことを好きだ好きだと言つているけど、そんなものは今だけだろう。こいつらは、いずれ俺の手の届かないところに行く。それこそ、世界を、歴史を、変えるかもしれない。

だつたら……今だけは一緒に遊んでやるよ。

「いきますわ！」

「いくぞ！」

さあ来い！ と言いたいところだが——。

「……やつぱ、無理！」

俺は浮遊を使い、大ジャンプで上空へと逃げる。

「ヴェルト、あなた、いつの間にそんな使い方を！」

「そういえば、ギャンザとの戦いでもそれを！」

ウラには鮫島直伝の空手がある。俺が真正面から戦うのは自殺行為だ。実力差がありすぎる。

フォルナに関してはもはや説明不要。奴の間合いに入り込んだらソックロー負ける。だからこれくらいの距離を取つて、セコイ手で攻めるしかないんだよ。

「逃げないで降りてきなさい、ヴェルト！」

「一秒で降りてこい。さもなければ、意地でも落とすぞ」おーこわ。

それにして、自分でも驚きだ。

浮遊は……かなり使える。

自分の靴や服を浮遊させることで、俺自身が宙に浮く。

「覚えときな。男は高いところが好きなんだよ」

これなら離れた場所からでも、相手を攻撃できる。

「ふつじべ」

俺は二人に向かつて念じた。

「ツ！」

「か、体が勝手に！」

さつきは二人を宙に浮かせただけだが、今度は後方へと吹っ飛ばす。

まるで超能力者にでもなつた氣分だ。ハンドパワーで相手を吹き飛ばす感じかな。だが、さすがに一人ともそこまで甘くねえか。

「同じ手は通用しませんわ！」

「活か！」

遠くに飛ばしてやろうとしたのだが、二人はまた俺の浮遊を強制的に解除しやがつた。そして当然、怒つてらつしやる。額に血管を浮かび上がらせ、次の瞬間、空に浮かんでいる俺目がけて飛んできた。俺がそこまで高いところにいるわけじゃないとはいえ、なんつー脚力だよ。

「もう怒りました！ 一度叩いて差し上げますわ！」

「お仕置きだ！」

気づけば、腕を振りかぶつた二人が俺の目の前にいた。そりやー、こいつらレベルならこれくらいワケねーか。気づくのが遅すぎた。これじゃ回避できねえ。

「なら、耐えてやるよ！ 一発くらい！」

前世から今まで、俺がどんだけ殴られてきたと思つてやがる！
ヤセ我慢は不良の得意技だ！ 全神経集中させてガードすりやあ――。

「サンダーナックル！」

「魔正拳まさいけん！」

全身を衝撃が貫く。巨大なハンマーでぶん殴られたような感覚。

「うごほあ！」

やべえ、ヤセ我慢とかのレベルじやねえ。前世も含めて、こんな強烈なパンチは初めてだ。俺は受身も取れずに地面に落下した。シャレにならないほど痛え。

「ヴェルト、少しほは反省しましたか！」

「次は手加減しないぞ！」

地面に降り立つて俺を叱りつける一人……だが、言い返せねえくらい体が痛い。これはもう、すぐに謝つて終わりにしたほうがよさそうだ。なのに……。

「なんで俺、立……つちやうのかね」

無意識のうちに立つちまつたよ。まあ、そりやそーか。

ガキに見下ろされたまま、引き下がれるわけがねーからな。

ガチで喧嘩する気はなかつたが、このまま終わるのは我慢ならねえ。

「むつ、およしなさい、ヴェルト！ ちょっと強くやりすぎましたわ。って、ワタクシはちゃんと
加減したのに、あなたが下手だから、ヴェルトがあんなに激しく落下したのですわ！」
「バカを言うな！ 私の体術はお前の無駄に派手で乱暴な魔道兵装とは違う！ お前がやりすぎた
んだ！」

「まったく、俺も情けねえな。かつては最強とか自惚れてた不良がこれか？ 十歳のガキどもにここまでバカにされちゃ、男が廃るつてもんだよな。」

「安心しろ。怪我は男の勲章なんだよ！」

「パワー、スピード、魔力、センス。ハッキリ言つて俺が一人に勝つているものは一つもない。」

「まったく、そうやって意地ばかり張つて！ ヴェルトは昔からそうですね！ まあ、そういうところが放つておけないのでけど」

「ヴェルト、お前は戦いには向かない。これから先は、私がお前の代わりに戦おう。ヴェルトが死んだりするのは、絶対に嫌だからな」

「ベラベラとよく喋る奴らだ……だが、俺は俺のやり方でやらせてもらうぜ。」

「だったら、これも覚えておきな。男には、勝てなくとも逃げちゃならねえ時がある。まあ、俺の場合は『どんな手を使つても勝つ』って思つてるけどな」

「そうは言つたが……さあどうする？」

「警棒を使うか？ いやいや、女相手に武器とか、最低だから却下だ。」

「素手でぶん殴る？ それもだめだろ。
となると、

「ふわふわ……」

「何となく、俺はそう口にした。
試しにやつてみただけなのだが。

「あつ……できた」

「いたいた！ こ、これは、ワタクシたちがさつき碎いた道の破片？」

「ツ！ い、石の破片？ ヴェルト、お前はこの期におよんで、まだそんなイタズラを！」

さきほどのフォルナとウラの技で碎けた、地面の破片の一部。それを二人の足元から浮かせて、コツンと頭に当ててやつた。

ダメージなんてあるわけないし、二人は余計に怒つただけだ。

「イタズラで済んでるうちは、かわいいもんだろ」

「浮遊は、触れた物だけを浮かせることができる魔法。そう思つていた。

「くくく、ははははは、こいつは俺も驚いた」

だが俺は、たつた今浮かせた石に一度も触れていない。

「スーパー何たらの覚醒とまではいかねーが……スゲーことに気づいたよ」

「そう、俺は気づいたよ」

「何を言つてますの？ 往生際おうじょうきわが悪いですわ！」

「今ならこれ以上、怒らないでいてやる」

俺の浮遊フローティングは……たとえ触れていなくても、視界に入つたものなら浮かせることができる。たぶんな。

誰もが使える初期魔法。この世界ではありふれ過ぎていて、誰も深く追求しなかつたのか？ いや、他に窮めるべき魔法がありすぎるから、見落としていたのかもな。

大きな利点だ。今やっているのはストリートファイト。この場にあるもの全部が俺の武器。道に落ちている石や木材も、そのへんの主婦の買い物袋も——全部だ！

「全部浮けえええええ！」

今はまだ、そこまで重いものを浮かせられるわけじやねえ。浮かせて動かす速度も。だが、それは魔法の練度れんどを高めていけば向上するはずだ。いつかは家を、城を、大地を、大陸そのものを浮かせることも？

そして、移動させる速度を極限まで高めることも？

できる。俺の生涯しょうがい、魔法を覚えるキャパシティをすべて浮遊フローティングに費ついやすなら——できる。

「えつ、ええ？ ええええええ！」 な、何ですの、これは！」

「なつ、ば、バカな、ヴエルト、お前、何をした！」

二人が度肝を抜かれている。まあ無理もない。俺自身、驚いているからな。

「お、おい、石が、木材が、樽たるが！」

「わ、私の買い物袋が！」

「どわあああ、店の看板が！」

街中が無重力空間にでもなつたように、様々なものが空に浮かんでいく。

「さあガキども、今度はこつちの番だ。お尻しりペんペんしてやる。怒りのふわふわ時間タイムだぜ！」
やべえな。ギャンザとの戦いでコツを掴んだのか、俺もそこそこ強くなつてるじやねえか。

「ヴエルトの奴、一体どんな魔法を使つてるんだ！ あいつは落ちこぼれじやなかつたのか！」

「そうだよ。そもそもあいつは、魔法学校中退だろ！」

街の連中のざわめきすら、今の俺には心地いい。

「それ！」

宙に浮かんだ街中の物体。俺はそれを、フォルナたちに向けて空から降らせた。時間差をつけて、四方八方から逃げ場なく。

「くつ、こざかしいですわ！」

「こうなつたらすべて打ち落とすまでだ！」

おお、あとでちゃんと弁償べんじょうしとけよな。

まあ、石やら木材やらをたたぶつけたとしても、結果は目に見えている。フォルナとウラの高速の拳が、飛んでくる物体を次々に打ち落としていく。

「さあ、どうしましたのヴェルト。これでワタクシに勝てると思いませんの？」

「お尻ペンペン？ できるものならやってみろ！」

さすがだな。だが、これならどうだ？

「あああ！ ひ、姫様、危ない！ た、樽が！」

他の物の中に紛れ込ませておいた二つの樽が、ウラたちに迫る。

「こんなもの！」

「ふん！」

二人は軽々と樽を碎いた。

中身が何であるかも確認しないで。

「えつ！」

「なつ、何！」

二人が碎いた樽から透明な液体が大量に飛び散る。それを避けることができず、二人はびしょ濡ぬれになつた。

「これは、み、水？」

「こつちは……あ、油か！」

正解。水と、油だ。俺はそれを知つていた。樽の持ち主の家に、何度も出前に行つたからな。

「く、これでは、ワタクシの魔法は……」

「オルナの魔法属性は雷。だから自分が水に濡れた状態で魔法を使うと、自滅する恐れがある。これでオルナの雷は封じた。

「す、滑つて、うう、バ、バランスが！」

辺りの地面も自分自身も、油まみれのウラ。奴の空手は踏み込みが重要なわけだが、ヌルヌルしてては力が入らない。地面の油は、オルナの周りにも及んでいる。

「ほれ

二人の履いている靴の爪先を、俺は手前に引っ張るように少し浮かせた。すると一人はすつてんころりん。

「ぐつ、ヴエ、ヴェルト！」

「うう、ツルツル滑る、ううう、気持ち悪い！ ベトベトする！」

オルナは魔法が使えない。ウラは踏み込みができない。

「くはははは、さすがのお姫様たちも、ヌルヌル相撲はやつたことがないみてえだな！ ほれ、ほれ、ほれ、ほれ」

「ぎやふ、つあ！ いた！ あう！」

「がふつ、たたたた、いた！ や、やめつ、たああ！」

何だかスイッチが入つちまつた。

俺は二人を、何度もひっくり返す。

全身油まみれ、ヌルヌルのベトベトになつた二人。

ガキ相手に何をしてるんだか……何か、スゴくいけないことをしている気がする。前世の朝倉リューマ時代にやつたら、逮捕たはされたかもしけねえな。

仕方ねえ。ここで手打ちにしてやるか。

さて、そろそろ降参したらどうだ

「なつ！」

「こ、降参だと！」

声を上げる一人。

「ああ。どーセ、俺には勝てねえだろ？」

「だ、誰が降参などするものですか！」

「こんな、こんな卑怯ひきょうな手を使う奴などに屈してたまるか！」

……ふーん、そつか。そういうこと言うんだ。

「あつそ。なら、後悔すんなよな。ほれ！」

奥の手だ。

「ふえ？」

「……えつ？」

俺は、ヨロヨロと立ち上がつた二人のスカートの裾を、浮遊フローティションでめくつてやつた。

周囲は——三百六十度死角なし。

「はつはー！ どうだ！ パンツ！ ツー！ 丸、見え！ くはははは！」

フォルナは白黒縞しまパンツ。ウラは、水玉模様だ。

「あ～あ、恥ずかしい。乙女おとめがよお、はしたないぜ？」

これでギブアップしてくれれば。

「……」

あれ、なぜか二人とも黙つちまつた。
街の連中も、絶句ぜつくしている。

「ん？ どうした皆？ ウ、ウケると思つたんだけど

空気がおかしいぞ？ 何か……スゲー重い。

「ヴエ、ヴエルト、おま……そ、それだけは、女の子にやつちやいけねーだろ」

「ああ！ ママ、見て見て、あの二人、パンツ丸出しだよ？」

「こ、こら！ 大きな声で言つてはいけません！ あと、見ちゃダメ！」

俺はアレか？ 外したのか？

爆笑を期待してたんだけど……。

フォルナとウラは、まだ黙つたままだ。

「お、おい、どうした、何か言えよ！ 無言は反則だぞ！」

だが、二人は俺の言葉に反応しない。

そして……奴らの肩が徐々に震えだした。

これは、超ブチ切れとか？ そうなつたらまずい。

俺はマジで殺されるかもしだねえ。

「あ、あ、俺が悪かったよ！ ほんの冗談だからさ、勘弁かんべんしろ！」

だが、二人はやはり無言のまま。これは本当に、殺されるかもしだねえな。

俺がそう思つた、その時だつた。

「……ひつぐ……」

「……ぐす……」

何だ？

「えつ？ お、おい、まさかお前ら……？」

次の瞬間——。

「うつ、うええええええん」

「あああー、ああああー」

マジギレではなかつた。

「ちよ、お前ら、何を泣いてんだよ！」

マジ泣きだつた。

二人は油まみれの地べたにペタンと座り込み、人目もばばからずに泣きじやくる。

「ううう、ヴェルドのバガー、イジワル、エッヂー！ いっぱい転ばせるし……ズルいし、うう」

「ひどい……こんな人前で……うう、うわあああああああん」

こ、これは、ある意味一番まずい展開だ！

こいつら、女の最強の武器を使いやがつた。

「ああー、もう、何なんだよ、たかがスカートを……たかが……あれ？ ちょっと待てよ、俺」
待て待て待て。

冷静に考えてみたら、俺が……精神年齢十七歳。プラス十歳の男が、十歳のガキのスカートめぐりつて……。

「うおおおおおお、俺は、俺はアホか！ 馬鹿か！ 死んじまえ！ ああ、ドアホ！ ドアホ！
この変態クソ野郎！」

俺つて奴あ……どうしようもねえ！

「うううう、ひつぐ、うう、見られた。うう……国民の前で、ヴェルト以外の人に、うわああ
ああ」

「ばかもの、うう、どうしてこんなイジワル、わだしのことをきらいだがら？」

二人のそんな言葉も耳に届かず、俺は油だらけの地面にうずくまり、自分で自分の頭を殴り続

けた。

「うおおおお、このクソバカ野郎！ 俺のタコ、ドカス、クソミソ！ 野郎！」
まつたく……こんな姿、神乃にや絶対見せられねえな。



泥んこ遊びをして泥だらけの子供——それはいかにも微笑ましい。だが俺たち三人は泥じやなく、油にまみれてヌルヌル……。フォルナも連れてひとまず家に帰ると、先生に深いため息をつかれた。

「「「ごめんなさい」」」

三人揃つて頭を下げる。

「つたく、まあいい。さつさと体洗つてこい」

今回は俺もやり過ぎた。

あのあとすぐ、「ヴェルトたちは痴情のもつれで喧嘩したらしい」という噂うわさが王都中に流れた。まあ、一種のゴシップみたいなもんでも、誰も本気にしちゃいないだろうが。姫さんの着替えはあとで持つていきます。あと、おいウラちゃん、風呂入つたらこれに着替えな

「えつ？」

風呂に行こうとするウラに、先生が何かを放つた。

それは、女の子用の服。ノースリーブのシャツと、白いスカートだつた。

庶民向けの少々安っぽい作りではあるが、素朴そぼくでかわいらしいデザインだ。

「あの……これは？」

ウラが聞く。

「さつきな、お前らの喧嘩を見た近所の人が、『ウラちゃんに渡して』って持つてきてくれてよ」「えっ、私に？ に、人間が？」

ウラは信じられないといった表情で、その服を持つたまま固まつてている。無理もない。ついさっきまで、街の連中から「魔族が……」などと煙けむたがれていたのだから。

先生が近づき、笑いながらウラの頭を撫ななでる。

「なーんかよ、近所の人らが言つてたぞ。『ヴェルトにイジワルされたら、すぐに相談しろ』ってな

「え……」

目をぱちくりさせるウラ。

こいつが油まみれであんだけワンワン泣いている姿を見て、街の皆も毒氣どけを抜かれたのかもな。魔族といつてもしよせんは子供だ。もちろん皆、心からウラを迎えたつてわけじゃないだろうが、そこは何といつてもエルファーシア王国。農民の家に、姫様が自由に遊びに来ちまう平和な

国だ。

「くはははは、よかつたな、泣き虫」

俺は嬉しくなつて笑つた。

「うつ、な、泣いてないぞ！ ヴェルト、子供扱いするな！」

「はいはい、よかつたねー、泣き虫お姫様。ほれ、さつさと風呂入るぞ」

「あつ、待て、この、うう、私は泣いてなんかないぞ！」

魔族と人間の問題すべてを水に流すとまではいかないだろうけど……そんな大きな問題、俺は興味ねえ。

自分の手の届く範囲でウラを守つてやれば、それでいい。

「ちょつ、ワタクシもお風呂に入りたいですわ！」

いきなりフォルナが声を張り上げた。

「お、入れ入れ。もう一人の泣き虫お姫様よ」

それに……こいつら二人の問題も、少しは解決したかな？

「ううう、今日のヴェルトは一段とイジワルですわ！ ウラも苦労しますわよ」

「まつたくだ。こいつにデカイ顔されるのは気に食わん。今度また二人で挑戦して、絶対に倒してやろう」

そう言つて頷き合う二人。

仲良しとまではいかないが、ライバルつてところか。

何だかんだでうまくやつていけそな二人を見て、俺はホツとした。

「さて、さつさと風呂に行こうぜ」

油でヌルヌルの一人を連れて、家の風呂場に向かう。

「ううう、この服、結構お気に入りでしたのに。捨てなきやいけませんわ」

「ヴェルトのせいだ」

廊下を歩きながら一人がぼやく。

「悪かつたつて。もうしねーよ」

「全然反省がこもつてませんわ！」

「ちゃんと謝れ！」

「はいはい、すんませんねー」

「まったく……そもそもヴェルトは、騎士道精神——礼節をもう少し身につけるべきですわ」

あ？

「そんなでは、将来他国の王族とのパーティーや会談に、あなたを連れて行けないではないですか？」

「おいおい、何を言つてんだ？」

「ちつ、仕方ない。私も王族の身だ。私は魔国流だが、今度礼節を叩き込んでやる」

あ、はいはい、そうですね。今日は俺が全面的に悪かったです。だから、もうネチネチ言うなっての。

「つたく、わかつたよ、機会があれば教わってやる」

風呂場の脱衣所に入り、俺は服を脱ぎ始める。

「あつ、ヴェルト、そうやつて脱ぎ散らかしてはいけませんわ！」

「本当に子供だ。ちゃんと籠に入れろ」

こいつら、俺の母ちゃんか？

ぶつぶつ言いながら俺の服を整理しだしたフォルナとウラだつたが——ふいにピタリと動きを止め、顔を上げた。

「……お風呂つて、ヴェ、ヴェルトも一緒に入りますの？」

慌てた様子でフォルナが言う。ウラは顔を赤くして黙つている。

「ああ？ ジャあ俺が上がるまで向こうで待つてるかよ？ それとも先に入るか？」

俺は別にどつちでもいい。まあ、早く汚れを落として一けど。

つて、こいつら、何をモジモジして……ああ、そうか。恥ずかしいわけね。

「つたく、それじゃあ、お前ら先に入れよ。俺はあとでいいから」

「えつ？ あつ、でも、その、ええつと」

「いや、あの、その、何だ？ ヴェ、ヴェルトがどうしてもつて言うなら一緒に入つてやらんでも

も……」

……つたく、このマセガキどもが。なーにを色氣づいてやがる。

「いいから先入れつて。向こうで待つてつから、上がつたら教えるよ」

「ま、待ちなさい！ 一緒に入らないとは言つてません！ まとめて入つたほうが、お、お湯の節約にもなりますわ！」

あ？ 節約？ 何でお前がそんなこと気にすんだよ？

「ま、待て待てヴェルト！ 三人で入るぞ。うん、は、入るぞ！」

ウラもウラで、なんつー慌てつぱりだ？

一大決心でもしたような顔のフォルナとウラ。お互いしきりに頷きながら、油の染み込んだ自分の服に手をかける。

つたく、たかが十歳のくせに背伸びしやがつて。

そりやー、公衆の面前でのスカートめぐりは精神的にきつかつただろうけど、仲間内のガキ同士で風呂に入るのに、何をそんなんに……。

「つと……ふう……」

「よいつしょつと……」

上着を脱ぎ、シャツのボタンを外していく一人。

そして、俺は次の瞬間——衝撃を受けた。

「あつ、も、もう、ヴェルトの、エッチ」

「ス、スケベ、あんまりじつと見るな」

全身に稻妻いなまが走り、気づいたら俺は脱衣所を飛び出して、素つ裸のまま廊下しよぞうを疾走しじそうしていた。

「ちよつ、待てええええええ、そんなバカなああああああああ！」

ありえねえ！ 嘘うそだろ？ 十歳のガキんちよだろ？ が！？

何で？ どーなつてんだよ！

「ヴェルト、ど、どこ行きますのー！」

「ま、待て！ 何だ、私たちの体が何か変だつたのかー？」

脱衣所から聞こえてくる二人の声。

変だつたんじやねえ。知らなかつたんだよ！

「俺はアホか！ あれじや、男と風呂に入るのをためらうに決まつてんじやねえかよ！」

どうやら俺、またやらかしてしまつたらしい。

絶叫しながら家中を駆け巡つた俺は、気づけば廊下らうか続きのラーメン店の厨房ちゆうばうに來ていた。

「うるせーな、どうしたヴェルト！ つて、何だその格好は？ 風呂に入つたんじやねーのかよ」

「ヴェルくん、何で裸……風邪かぜ引きりますよ？ あ、お店の中に入つてきちゃダメです！ お客様

に見えちやうから！」

厨房の入り口に立ち尽くす俺を、先生と、嫁のララーナさんが目を丸くして見つめる。

一応、店内の柱のおかげで、客たちから俺の姿は見えない。

「せ、先生……た、大変だ……」

「あつ？」

「どうしたの？」

唾つばを呑み込んだ俺は、たつた今見てしまつたことを伝えた。

「フオ、フォルナとウラが、ブ……ブラをしてた！」

「……はつ？」

「何でだよ！ あいつら子供こどもだろ！ 何で子供があんなもん着けてんだよ！

先生はぱりぱりと頭を搔かく。

「あくヴェルト。すまん、俺が悪かつた。三人一緒に風呂に行かせたのは、ちとまずかつたな」

近づいて俺の肩に手を置き、俺にだけ聞こえるように囁ささやかく先生。

「はあ？ いや、それより、どうなつてんだよこの世界は！ 十歳のガキがブラなんてよー！」

「いや、別にこの世界に限つた話じゃねーって。日本でも珍しくねーだろ」

「何で？ いらねーだろ！ ガキだぜ？ ガキ！」

「あのな、普通に考えてみろ。十歳つていつたら、日本じゃ二、三年後には中学生ちゅうがくせいだぞ。別にブラしてたつて変じやねえだろ？」

……え？

た、確かに……十歳つて、よく考えたらもうすぐ中学生じゃねえか！

この世界は小学校とか中学校とか分かれてないからな、すっかり忘れていた。

「俺、あいつらのことガキだと思ってたけど、そうじゃなかつたのか……」

「俺、あいつらのことガキだと思ってたけど、そうじゃなかつたのか……」

「いや、おい、ヴェルト。どうしたんだ？　お前、まさか急に、子供扱いしてたあの二人にドキドキしまつたとか言うんじや……」

先生。それは違うから。

頬むから、そんなドン引きしたみたいな目で俺を見ないでくれ。俺はロリコンじやねえ。

「そーじやねえよ先生。ただ何かさ……ほら、なんつうか、五歳から一緒のフォルナが十歳になつて、もうすぐ中学生の歳だなんてよ……年月が経つてるわけだけどさ、実感が全然湧いてこねーなあつて」

「んく、まあ、そうだろうな。俺からしてみりや、十代なんてあれこれイベントが目白押しで、あつという間つて感じだよ」

「ああ。なんか、こー、うるせえマセガキがそれなりに成長するくらいに、時間が経つちまつたんだなつて思つてよ」

「なうにをジジイみたいなことを」

二度目の人生だからだろ？　俺は自分が今十歳であることを、「まだ」十歳だと思っていた。だが、そうじやないのかもな。

「もう」十歳、なのかもしね。

あのギャンザだつて、十五歳で人類大連合軍を率いる将を務めてたんだ。

「そう考えると、俺は俺で努力してるつもりだけど……『神乃を探す』つて目標をさ、あんま計画なしにタラタラやつてるわけにもいかねーなつて」

いつか……神乃を探す旅に出よう。

そう思つていた。

だが、その「いつか」てのは、一体いつだ？

「ヴェルトー！　今さら恥ずかしがつてないで早く来なさい！」

「私たちだつて恥ずかしいんだぞ！　でも、お前がどうしてもつて言うから！」

裸にタオルを巻いたフォルナとウラが、俺を連れ戻しに来た。

この時、いつものように心の中で思つていた「うるせえガキ！」という言葉は、不思議と出てこなかつた。

そして、俺はやがて知ることになる。

この荒れ狂う世界の中で、俺たちはいつまでも、子供のままでいられないということを。

「い、いら、しゃいませ～」

ぎこちない笑顔で、店にやつて来た客を精いっぱい出迎えるウラ。

接客など人生で初めてのことだろうし、祖国が滅びなかつたら一生することはなかつただろう。

「そうだ。いつも笑顔を忘れずに、だ」

俺は厨房から、フロアのウラに声をかける。

「う、うん」

「そして客が来たら即座に水を出して、注文を取る！ この一連の動作を、素早く流れるように！」

ウラはよくできた奴だつた。

あの油まみれになつた日の翌日に「魔族の私に、衣食住を提供してくださつてているのだ。いつもでもただ甘えているわけにはいかない」と、自分からラーメン屋の手伝いを申し出た。それから一週間、決して楽ではない店の仕事を続けていたが、こいつは一度も弱音を吐いていない。

「こ、こちらの、お、奥へどうぞ～」

白いエプロン姿のウラを見て、これが魔族の姫だなんて誰も思わないだろう。

「おい、ウラ！ 空あいた席から皿を片付けろ！」

「分かつた！ 今やる！ ヴェルトも、焼きソーバはまだか？」

「い、今やつてんだよ。ちつと待つてろ」

「おつ、こんちは、ウラちゃん。今日もがんばつてるね～」

「おーい、ヴェルト！ 新しい嫁さんにばかり働かせるなよな～」

一生懸命働く姿というのは、見る人にとって気分がいいものだ。

ウラの熱心な接客のおかげか、店はここのことろ今まで以上に繁盛はんじょうしている。

こいつが働くようになつて俺の雑用が減ると思っていたんだが……何か前より忙しくなつてる気がするな。

「メルマさん、ワントーンメーンとギョウーザ追加だ」

ウラが先生に新たな注文を伝える。ちなみにメルマというのは、先生のこの世界での名前だ。

「あいよ！」

「ラーナさん、壺つぼの中のガルリックが空からです。予備はどちらに？」

「あら？ ちょっと待つててくださいね。奥の棚にあるから、今取つてきます」

「ヴェルト、焼きソーバが焦げこしまうぞ。しつかり火加減を見ておけ。ボーッとするんじやない」

「うるせえウラ！ つて、おつ、おおおつと！」

危ねえ危ねえ、本当に焦がしちまうところだつた。

「あつ、い、いらっしゃいませ～、今テーブル片付けます。えーと、注文ですね、少々お待ちくだ